
魔法呪研究部!

川崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法呪研究部！

【Nコード】

N7738U

【作者名】

川崎

【あらすじ】

ある年のある夏。

主人公である岡沢水樹は詐欺的な手法にかかり、まほうじゆけんきゆうぶ魔法呪研究部――

――略して魔研部に入部することに！

絶対に抜け出すことが許されないこの部。

そして個性的な部員。

最初、水樹は放り出そうとするが…。

とてつもない駄文ですので観覧注意です。

こんなもん読んでるなら髪の毛1本1本抜いてた方がよっぽど楽しく有意義な時間過ごせね？
ってな感じですので。

※注意※

この小説はふいくしよんでし！
実際のなんちゃら、実際のなんちゃら等とは一切関係がないのでなんちゃら！

この小説には若干の下ネタを含むかもしれないかもです！ちよつと！回れ右しようとした方々！お待ちになって！下ネタって言っても小学生レベルだから！まあ下ネタには変わりないんだけどさ！

1 (前書き)

えーと、初めての小説です。

いや2ちゃんねるでちょこつとやってたか…。

まあ初心者には変わりないです。

更新スピードは例えるなら時速1?程度ですので待つのが大嫌いな方にはあまりお薦めできないかと…。

1

それは柔らかい太陽の光が容赦なく照りつける季節。

「諸君っ！我々は今世紀最大の危機に遭遇している！」

『はいっ、部長！』

一人の威勢の良い声に複数の緊張感を含んだ声が返される。

「そう、我が部は今週までに男性部員を獲得せねば廃部となってしまう！」

「まあ…」 「どうしたのか」 「そ、そんな…」

「そして今週は残り八時間を切ったアッ！」

「あらあら」 「ふむ…」 「どど、どうしましょうっ」

「というわけで我が”魔法呪研究部”はミッシヨンドキドキッ！ハートの楽園へようこそ☆を実行するっ！」

「そしてそしてっ！ターゲットは…」 部長と呼ばれた少女は、人差し指を立てた右腕を高々と挙げる。

そして――。

「真希！あなたが決めなさい！」

「え、えええ！？」

とある少女の目の前に降りおろされる――。

###

「あー、暑い…」

おかざわみずき

俺、岡沢水樹は夏の特別講習の真っ最中にいる。

別に成績が悪かったわけでも、問題を起こしたわけでもない。

(しかし…)

(あの先生…)

（胸でけえなあ…）

そう、俺の目当ては胸。巨乳。乳。ボインだ。おっぱいだ。

（やっぱ来てよかったよなあ…）

講習もろくに聞かず、視覚だけに神経を集中させて講師の胸を堪能している。

「…なあ水樹」誰かが小声で話しかけてくる。恐らく親友の高橋だろ。うっさいなあもう。こっちはこっちで真面目に乳を堪能しているのによ…。はいはい無視無視。シカトしましょー。

「水樹！おいつて！」

お、今揺れた！おっぱい揺れた！

「みいーずうーきいー」

透けブラキタアアアッ！

「聞いてんのかよ水き——」

「だあああああっ！うっせえな！テメエはさつきからよ！講師のお姉さんのおっぱいで精一杯なんだよ話しかけんな童貞がっ！死ねっ！！デブホモにケツの穴掘られて死ねッッ！」

「…へ？」

高橋の間拔けな声。

静まり返る室内。

「あ…いや…その…」

はっ！あの巨乳講師が俺を見つめている！くうっ、いけないぜ先生エ…俺とアンタじゃあ…ってそんなこと考えてる場合じゃねえよおおおおっ！！

「クスクス」「クスクス」「プッププ」

数秒後、室内全体に笑い声が広がったのは言うまでもない。

……………

……

「も、もう来ないでくれると助かるな…」

玄関ホールにて助手らしき人物に立ち入り禁止を宣告される。

クソッ、全て高橋のせいだ。やつめ…後でみてろ…次にお前がパソコンを起動したが最後…HDDをまるごとネット上に公開してやる…。

「くつくつく…」

…ふう、復讐は後に考えることにして、と。取り合えず家に帰るか。暑いしな。

はあ、家帰ったらゲームするかー。

そういや新作のエロゲ未プレイだったなー。

時間があるうちにやっとなかないと。

そんな平凡なことを考えていた時だった。

『突撃っ!』

不意に後ろから知らない女性の声がした。

(なんだなん……)

気になって後ろに首を動かそうとした瞬間。ドスッ。鈍い音が、頭の後ろから響く。

俺の意識は、そこで途切れた。

###

「突撃っ!」

…部長である梨香さんの声を合図に、私、津川真希^{つがわまき}と栞先輩とみのり先輩がミッシュンドキドキッ!ハートの楽園へようこそ☆を実行する。…突っ込むなら奇妙なネーミングセンスを持った梨香さんに

突っ込んでください…。

このミッションの成功条件…それは『ターゲットである岡沢水着君を気絶させ、部室まで拉致…じゃなくって連行すること』
ご、ごめんね岡沢君…こんなことになるなんて…。

「真希、何をやっているの。振り向かれたらおしまいよ」

「は、はいっ」

栞先輩に小声で注意される。

今は集中しなくちゃ…何度もマネキンの頭で練習したんだから…っ。

（真希…いまだ）

（了解っ）

アイコンタクトでみのり先輩に指示される。

そして。

「はあっ!!」

ドスッ。

渾身の一発を岡沢君の後頭部に叩きこんだ。

音もなく崩れる岡沢君。

うう…ほんと…ごめんなさい…。

「真希、よくやったわ!」

これまで十数メートル後ろの物陰に隠れていた梨香さんが私たちに近付く。

「あなたは罪悪感を背負わなくていいわ」

「えっ…でも…」

「男は女の子に殴られるのが大好きで堪らないのよっ」

そういうながら岡沢君を肩に担ぎこむ梨香さん。

やっぱ力あるなあ…ってそうじゃなくって。

「大好きな割りには気絶してますけど…」

「あー、あれよ。絶頂を迎えたのよ、気持ちよすぎて」

「そ、そそーなんですか！？岡沢君っ、痛くて気絶したんじゃないんですか！？そんな変態だったんですか！？」

「こらこら静かにしなさい。コイツ…岡沢水樹には部室に着くまで眠っていて貰わないとこまるんだから」

「むう…」

部室に着くまで…かあ。

部室に着いたらアレやらずにちゃいけないんだよね…。

恥ずかしいなあ…絶対変な人って思われるよ…。

私達は15分で部室に到着する。

梨香さんは15分、ずっと岡沢君を担いでいた。

(す、すごいな…)

やっぱり二学年体力テスト第一位の称号は伊達じゃないよね…。

岡沢君が目を覚めたのは部室に着いてから10分後のことだった。

###

うー…ん…。

あれ…頭痛いな…。

俺なにしてたんだっけ…。

確か…夏の…特別講習…で…講師の…っ！！

「おっばい、おっばいはどこだ！？」

俺は慌てて飛び起きる！寝てる場合じゃないっ、おっばい、おっばいを見なきゃいけないんだっ！

…あれ、そういえば俺追い出されたんだっただよな？
というか…。

薄暗い部屋。いや、部屋というより物置だ…。

…えーと。

「ここ、どこですか？」

取り合えず呟いてみる。

しかしそれに答える人は――「魔法呪研究部よ」――いた。
開かれる扉に、薄暗い空間に差し込む光。

『ようこそ！通称魔研部へ！』

複数の美少女が、明るく、曇りのない声で俺を迎える。

……え？ここ天国？

………

………

………

………

「さーて、自己紹介しましょ！」

「え？なんでまた」

「私の名前は佐々木梨香！ささきりかよろしくな！」

「は、はあ…」

勝手に初めやがった。

…俺より少しばかり背の低い茶髪のポニーテール美少女…。リボンの色を見る限り二年の先輩が懇切丁寧に、そして勝手に自己紹介を始める。我が儘な性格だよな。この人。絶対。

「因みに私は魔研部の部長様だ！」

「そ、そーなんですか…」

愛想笑いを浮かべる俺。

正直、どう反応していいか分からない。

すると、背は俺と同じ位の腰まで届く程ある黒く長い髪をもった美少女が口を開く。

「二年A組、せきはらしおり関原菜よ。趣味は読書にアニ…な、なんでもないわ。

よろしく」

手を差し出す栞さん。

どうやら俺は握手というやつを求められているらしい。

えっ、触っていいの？

本人公認で美少女の手をニギニギしていいの？クンカクンカしていいの？

：ゴクリ。

俺の喉になる。

しかし、どうする。どんな握り方すればいいの？指が絡まるように握ればいいの？

わ、わかんねえよツツ！なんだよこれどうやってペロペロすればいいんだよおおおおっ！！

「握手は嫌だったかしら？」

「へ？」

「初対面で握手はおかしかったわよね…」

「あ…いい、いやいや！そんなことないですっ！ペロペロ…握手！握手させていただきます！」

「あらそう？良かったわ」

普通に握手を交わす。普通に。そして普通に手を離す。普通に。

：なんだ。普通でいいのかよ…。

自己紹介で握手求められたなんて滅多にないぞおい…。

大人な人なんだな。この人は。

そういえばアニ…ってなんだろうか。

まあ深く考える必要もないか…。栞さんの自己紹介が終わると次は左腕に包帯を巻いた小柄な美少女が突然笑いだした。

「フッフッフ：ハーハッハッハ！！汝、我の自己紹介を望むか？」

「あ、いえ。間に合ってますんで」

やべ、反射的に断っちまったよ。いやなんかノリでさ？そんな「汝、闇の力を望むか？」みたいに言われてもさ。

ってそういう考えてる内に涙目だよこの子！

「き、聞きたくないのお？うっうう…えぐっ…」

「あ、あはは…じょーだんだよー。ほら、聞くから泣かないで？ね？よーしよーし」

思わず頭を撫でる俺。

よーしよーし。泣き止んできたぞー。

ちっくしよ泣いてる女の子って可愛いなあ…。

あれ、俺ってSだっけ？女王様だっけ？

違う違う。自分の意思を取り戻すんだ…俺はM…マク○ナルドのM…そう、女王様サイドなんかじゃねえ…俺は豚サイド…。

「ふう…危うく自分を見失うところでした」

「ふええ？どうしたの？」

「ハハ、なんでもないさ。ほら、自己紹介してごらん？」

「う、うん…。コホン、えーと、すまないな。無様な姿をさらしてしまって」

「!?! い、いや…お構い…なく…」

多重人格かコイツ!? 態度変わりすぎだろおい!

「我の名は平部みのり（ひらべみのり）。所属は二年A組。趣味は魔法呪の解析と魔石を集めることだ」

「へえ…流石は魔法呪研究部だな。俺、そんなもの存在しないと思っっていましたよ」

『…』

何故か魔法呪研究部メンバーが黙る。

「どうか、しましたか？」

「なな、なんでもないわっ! ね? みんな? ほらほら、次は真希の番よ!」

「あ…はい…」

どうしたんだ部長。心なしか、声が裏返っていたぞ。

…美少女の自己紹介タイムが再開される。

ってあれ? この顔どこかで……あ。

「えっと私、津川真希っていいいます! クラスは…「一年B組、だろ

？」

「え…なんで…」

「なんでって、アハハ。同じクラスじゃんか。仲間思いの俺が可愛いクラスメイトの顔を忘れてるわけないじゃないか」

まあ忘れかけていたんだだけだね。

「かかか、可愛い…って…」

「ん、どうした？顔真っ赤だよ？」

「…！き、気のせいです！そんなことより！趣味はイ、インターネットです！よ、よろしくお願いします！」

ペコリと頭を下げる津川さん。

んー、赤面といい、緊張しやすい子なのかな。

「さーて、次はあなたの自己紹介よ」

「い、いえっさー…。岡沢水樹です。クラスは津川さんと同じく一年B組です。趣味は…パソコンゲームです。終しまい」

「うん、よろしい」

「…あの、よろしいですか？」

「なに？質問？スリーサイズ以外ならなんでもいいわよ。真希のことなら」

「り、梨香さん！」

なんなんだこの人は…。

「まあいいか…。では、単刀直入に聞きます。」

「どうして俺はここにいますか」

そう、目が覚めたときから抱いていた疑問。

「まったく…真希のことならって言ったじゃない…。でもいいわ。あなたには知る権利がある」

「…」

今まで感じなかった部長さんのシリアスなオーラに、思わず息をのむ。

「あなた…呪いを掛けられたのよ」
「へえ…呪いか…呪いっ!？」

###

数時間前。

「…というわけで。くじ引きの結果、岡沢水樹を我が部にスカウトすることになったわ。いいわね？真希」

「は、はい…」

私に誰か一人男の子を選ぶ勇氣があるわけもなく、結局くじ引きで決めることになった。

「連行の手順はさっきの通りよ。私は後方で待機してるから」

「まあ、私とみのりは真希の補助役だし、真希が失敗しない限り出番はないわね」

「うん、期待させてもらおうよ真希君」

「……まかせてください…あは、は」

正直自信ないなあ…。

もしかしたら返り討ちにあって殺されるかもしれない…。岡沢君ってクラスでも謎だからなあ…。

「さて、次は部室まで連行したらの手順よ」

「ま、まだやることあるんですか…」

「当たり前よ。部室に連行はい終わりで部員が獲得出来るわけがないでしょう」

「う…すみません…」まあごもつともだ。

「…それで、梨香。手順って何かしら？」

「えーと、まず岡沢水樹の警戒心を解くために自己紹介よ」

「ふむ、梨香にしてはよく考えたな」

「うっさいわよみのり。次に、私が岡沢水樹に『あなた、呪いを掛けられたのよ』『呪いを解くには私達の力が必要』ってシリアスなムードで話すの」

「の、呪いですか…」

「まあ、仮にも我が部は魔法呪研究部よ」

葉先輩…でもそれはみのり先輩の…。

「そして『呪いを解いてあげてもいいけど、その代わり私達の願いを1つだけ叶えて』と言うのよ」

「その願い…条件が魔研部への入部ってことか…」

梨香さんの話を、みのり先輩が要約する。

「…なるほど」

私は頷いて納得してみせる。

というか、そんな幼稚なやり方で岡沢君を騙せるのだろうか…。騙せるわけないよね…。

それに…

「あとね、真希」

「は、はい？」

急に名指しされてビクッとしてしまう。

「あなたには…岡沢水樹に呪いを信用させるために…」

###

「呪い…ですか」

「ええ、正確には死の呪いよ」

部長さんが腕を組み、つり目気味の瞳で鋭い視線を浴びせてくる。とてもふざけて言っているようには見えない。

しかし呪い：そんなものあるわけが：いや、このちょっとした名門校にこんな部活が存在しているんだ。

とてもおふぎけでやってるような部には思えない。

もしかしたら本当に呪いは：ガクガクブルブル。

――でも、

「正直、信用できません。第一に：」

「そう言うと思って、今から私が真希に呪いをかけて見せるわ」

「ちょ、ちょっと待ってって部長さん！本当に呪いをかけられるとしてもしたら津川が：」

準備を始めようとしている部長さんを、俺が慌てて止めにかかる。が、部長さんは返事もせずに準備を始める。すると俺の肩に華奢で柔らかな手が添えられる。

津川さんだ。

「だ、大丈夫ですよ。呪いってひつても、危険じゃない呪いも、あり、ありますから！あは、あははは：」

津川さんはひきつった笑顔で囁みながらも安全性を教えてください。

「なら良かったけどさ：」

「よし、準備完了っ！」

どうやら部長さんが準備を終えたようだ。

片手には、さっきまでは無かった分厚く黒い本が。とても古そうだ。アニメやゲームなどと言う、魔導書のようなものなのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7738u/>

魔法呪研究部!

2011年10月9日10時24分発行